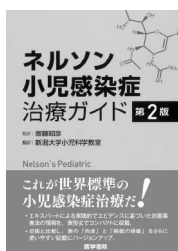


〔評者〕
宮入 烈
国立成育医療研究センター
感染症科医長



ネルソン小児感染症治療ガイド 第2版

齋藤昭彦 監訳
新潟大学小児科学教室 翻訳

●B6変型・頁312 2017年1月
定価：本体3,600円＋税
[ISBN978-4-260-02824-0]医学書院刊

小児の抗菌薬マニュアルと言えば、評者はこの本が真っ先に思い浮かびます。John D. Nelson や John Bradley といった小児科の重鎮の名を冠するこの黄色い本は米国の小児科診療の現場で長年愛用されてきた名著です。15年前、米国で小児感染症フェローとして働いていた評者も本書を“Red book”（American Academy of Pediatrics）とともにカバンに忍ばせ、コンサルトのたびに引っ張り出して抗菌薬の投与量を参照していました。今は、当院の感染症科フェローのポケットに収まり、他科からの診療相談のたびに活躍しています。

本書は、抗微生物薬の適応・用量・用法の詳細が記されたいわゆるマニュアル本です。しかし、40年以上にわたる実践の中で精度を高め、2年に1回（2014年以降は毎年）新たな知見を基に改訂され進化してきた実績があり、これに比肩するものはありません。特に治療薬選択の根拠となるエビデンスや注意事項が参考文献と共に記載されているのは本書の特徴です。例えば中耳炎の治療など議論的となる事項については、ガイドラインの推奨やシステムチェックレビューをまとめた「メモ」があります。また、壊死性筋膜炎や慢性骨髓炎に対する外科的介入の推奨など、最善の感染症治療に

ついて薬以外の治療にも言及されています。さらに、新生児、肥満児、市中MRSA感染症、小児特有の病態における予防投与などについても具体的な処方が記載されていて、包括的な内容になっています。もちろん米国のマニュアルを日本に導入するには、疫学や人種の違い、保険診療との齟齬がないかなどの検討が必要となります。そこは日米両国をまたぐ小児感染症のエキスパートである齋藤昭彦先生を中心に翻訳者陣が注釈を加えられており、大変助かります。

小児の抗菌薬の使い方を学びたい方にもイチオシの本です。冒頭には抗菌薬と抗真菌薬を選択するために鍵となる各薬剤の特徴が書かれています。一文一文に凝縮された情報を自分のものにすることができれば、自ら考えて抗菌薬を選ぶための強力な知識になります。他にも薬力学・薬物動態、静注抗菌薬から経口抗菌薬への切り替え方、副作用や相互作用などが学べる構成となっています。まずはこの本を通読し、実例に遭遇するたびに該当箇所を丁寧に読み直すことをお勧めします。読み返すたびに新たな気づきがあり、小児感染症診療に必要な抗菌薬の知識と考え方が身に付くはず